上狛エリア

1. 上狛（かみこま）駅

小さいけれど味わいのある駅舎。駅前のコンパクトさも現代では新鮮だ。

2. 松原邸

環濠集落の大規模住宅。母屋の設計図には明治42年の記録が残る。

3. 旧高木医院

受付ガラスに病院の名残が。地域のコミュニティカフェに生まれ変わった。

4. 山城JA倉庫

アート作品かと見間違う壁の模様は、実は空襲から守るための迷彩だった。

5. 山本邸

今も奥の工場でお茶の加工をされている。お茶の香りに満ちている町だ。

6. 阿野邸

昔は裏庭から木津川を渡る帆掛け船が見えた。そんな透かし絵も残る。

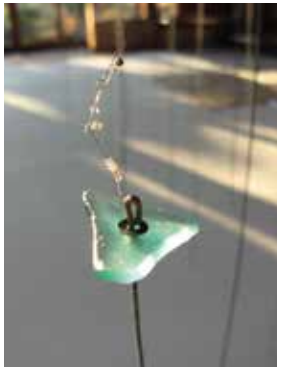
「“SHIMI-PROJECT : KIZU-RIVER”」 小原一洋
インスタレーション

染-プロジェクト/ SHIMI-PROJECTとは、その土地の水の文化、地形、歴史等をシミのカタチにし、その土地の住民のメタファーとなるハンカチに落とし込むことで「染」が出来上がる。「水×人×地域」の新しいカタチを形成し、製作物を使用することにより、その地域と水への共鳴を果たします。それが“染-プロジェクト”です。

1. 上狛駅

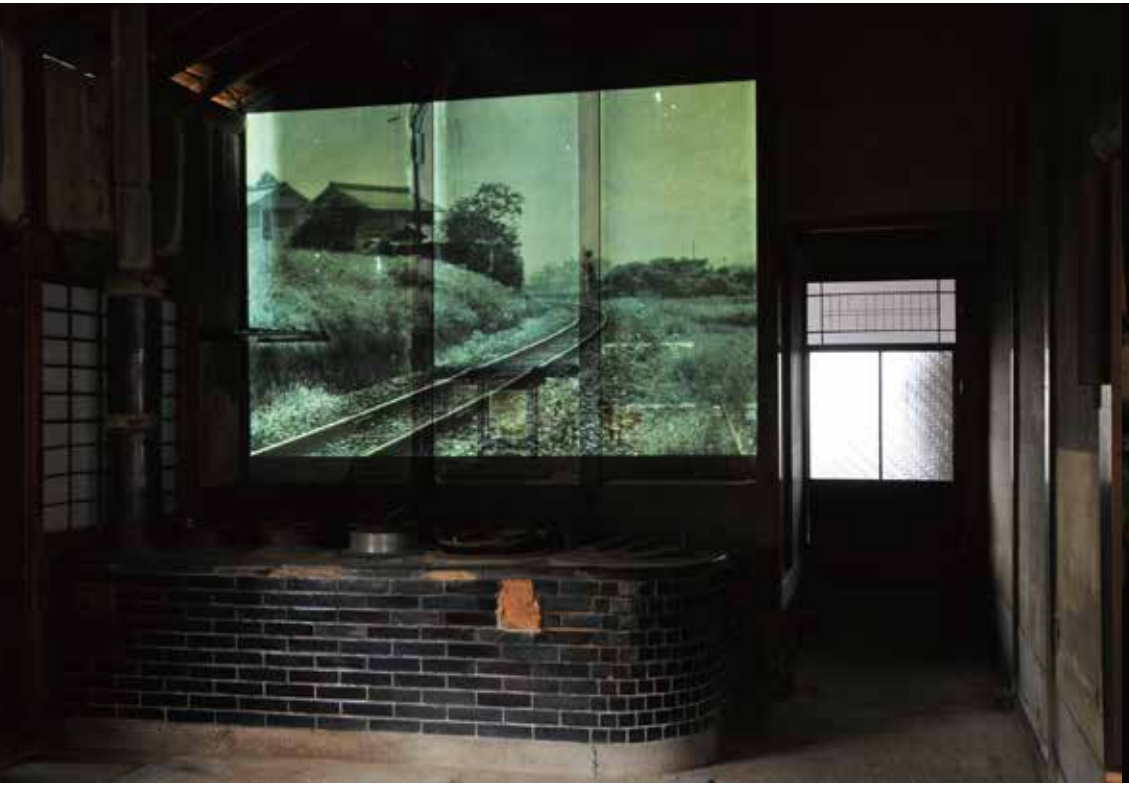
「そこに咲く花」 三上由美子
インスタレーション

かつて人の手で作り使われ、海へと流されたガラスたちが、長い時を経て砂浜に打ち上げられています。その欠片を拾い集め花を作りました。普段は砂浜で咲いている花たちが風に運ばれ、ふわり、松原邸に舞い込みます。歴史ある邸宅、受け継がれてきた思いを感じながら、秋の風に揺れるガラスの花を咲かせました。



2. 松原邸

「appreciation」　山本茂
写真



2011年5月5日、木津川市役所の撮影から、木津川アート2011の作品づくりを始め、それ以降、木津川市のいろんな場所を歩き、私が心を動かされた木津川市の風景を『明日への記憶』としてモノクロ写真に刻みました。今回の展示写真をきっかけに、改めて木津川市の美しい風景を知っていただき、ますます町が好きになったと言ってもらえましたら、心から嬉しく思います。

「Sleeping sounds」　川中政宏
インスタレーション

もう聞く事もない、家で埃を被っているオーディオテープ。それ等を見ているだけで頭の中に音が流れ、当時の記憶や感情までもが蘇ってくる。それは本当に正しい記憶なのかは分からない。音は記憶と共にあり、そこに在り続けるのだと思う。新しい記憶を重ねていきながら。

小西邸蔵

「ミラーカーテン」 林真衣

油彩

ミラーカーテンは外からの紫外線をカットしながら、プライバシーを守ってくれるマジックミラーのようなカーテンです。それはまるで見えない何かに怯えながら生きなければならない現代人の心情を写し出しているかのようです。カーテン越しに見える、柄と一体化して揺れ動く風景は、カーテンを開けると一瞬のうちに全てが消えてしまいそうで不安になります。今回は長年空き家だったこの場所で、止まっていた時間がゆっくりと動き出すような空間を演出しました。

3. 旧高木医院

「つなぐ」 上田普

書

3.11で味わった現実は、価値観を新たにする様な多くの事を考え学ばされる機会を持つ事に成った。無力さを痛感し、何が大事で、何を信用し、何が出来るのか。書の線は点の集積で成っているとも言われ、人や歴史のつながりも同様である。点は考え、意志をつなぎ、力強い線を生み出す。そんな物を表現しました。

4. 山城JA倉庫

「2011.11.3 釘跡」　井口智広
釘での表現

鹿背山付近の山が酷く削られていた。私たちの言葉は、届かなかった。これだけのみんなが、鹿背山の自然が素晴らしいと言っていて、それを守りたいがために、日本全国から来ているのに、簡単に壊してしまった。考える余地はなかったのだろうか？
とんでもない事をしているという自覚はなく言葉を失った。

4.山城JA倉庫

「ささめく」　小板橋慶子
インスタレーション

私の故郷・群馬県富岡市は、かつて養蚕の盛んな地であり、いまだ桑畑もたくさん見られる。そんな環境で生まれ育ったため、繭・お蚕さんの面影を感じることは多々あるが、直に接する機会はそれほど多くない。
近くて遠い存在。
遠くて近い存在。
お蚕さんの繭から誕生する新たな表情を、そして生命の連なりを体感していただきたい。

4.山城JA倉庫

「光の臨界　ながれのーすくい」　中橋祥行

立体

展示場所、周辺の風景や人との出会い、そんな空気を大切に感じて制作しています。今回、上狛へは大阪から木津で乗換えて木津川を見ながら渡ります。また展示場所からも5分くらいで木津川にたどりつきます。いろいろな細かい事に気を奪われがちな日々。何も無い様にゆったり流れている木津川を見るとほっとします。でも、一級河川の木津川も一粒の雨、湧水の一滴が集まり流れを成すように、自分の行いが一粒の雨、一滴にやがて流れに交じり、現在を形造っているのかなと制作しながらふと思いました。

5. 山本邸

「かみこま茶問屋ストリート絵地図」　円満字洋介

透明水彩

町そのものが実物大の作品だと思うのです。人の想いが刻み込まれた大きな作品。それはあまりにも日常的でよく見えない。そこでそれを目に見えるかたちにするのが建築探偵です。昨年はハガキスケッチとコメントで鹿背山を表現しましたが、今年は上狛の製茶問屋の町並みを絵地図で表現しました。見て楽しく読んでためになる、町を歩くとなお楽しい。そんな秋の一日を作りたいと思い制作しました。

6. 阿野邸

木津・本町エリア

7.木津川市庁舎

平成20年竣工、7階建て。木津川市の未来を引き受けた。

8.北大路集会所

毎月のお掃除を欠かさない。地区の交流の場所として今も活躍。

9.料亭川喜（かわき）

木津浜の歴史を見続けてきた老舗料理屋。玄関や路地に味わいが漂う。

10.八木邸

築80年の米蔵が圧巻。保存がすばらしく時を越えた今、人々を魅了する。

11.本町一丁目集会所

一丁目の銘入り鹿背山焼きのお茶碗が残っている。デザインが面白い。

12.奥鉄工所

奥行き27mの空間が圧巻。二つの作品により美術館に変身した。

「無題」 中島和俊

鉄の造形

地域社会が抱える問題の一つに、新住民と旧住民の間に生じる心の軋轢がある。木津、加茂、山城の三町合併で4年前に誕生した木津川市。悠久の歴史・文化と自然に育まれ、新旧の住民が混在するベッドタウンとして発展を遂げてきた。現在も一部地域で宅地開発が進み人口は増え続けている。一方、旧住民の多い山手は過疎化が深刻で、活性化の展望は乏しい。市の発展の影に、失われゆく自然と住民の絆が隠れ、地域の隔たりを深めている。市の発展を望むには、地域住民の融和を促し絆を紡ぐ作業が必要だ。農を介して自然の豊かさを享受し、希望の田畑を「開墾」したい。そんな願いを作品に込めた。

7. 木津川市庁舎

「満天の星の如く地には草木が在る」　植松美早
ソフトスカルプチュアー

今回木津川市にまつわる歴史や物産を知ることから私の作品製作は始まりました。戦前まで手作業で織られていたまぼろしの相楽（さがなか）木綿の布片、柿渋で5度6度と繰り返し染めた布、加茂町の壁紙工場から頂いた布引きの和風壁紙にフォルムを与えもう一度命を吹き込み、作品内部オーナメントとして組み込みました。

7. 木津川市庁舎

「ゆめで逢いましょう」　小谷茉未
立体

わたしを追う白と黒の怪物は、寂しがりやなわたし自身。“ 奴 ”はわたしの夢の中に現れたそのままのサイズで制作しています。内部に子供用の電動乗用ラジコンカーを仕組み、遠隔操作で動くようになっています。この作品の目標は、観に来た人にトラウマを残すこと。今度はあなたの夢の中に出てきますように。

7. 木津川市庁舎

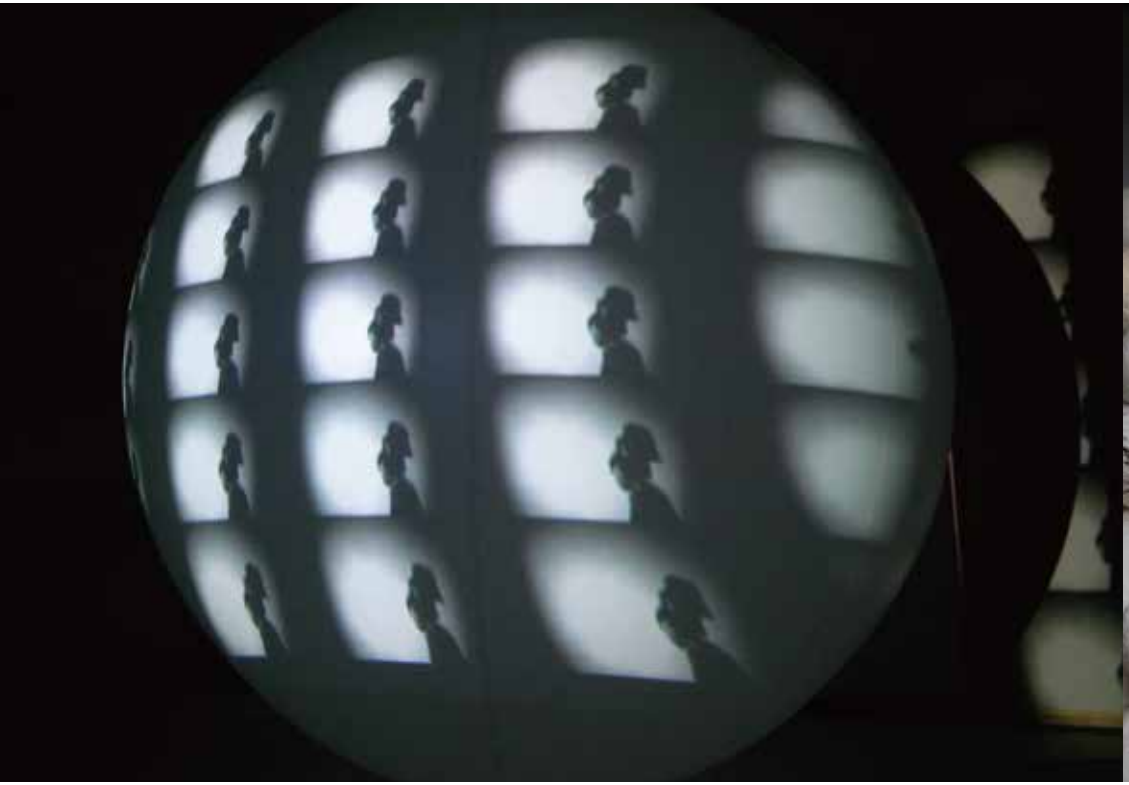
「あっちとこっち」 GO ／岡田翔
メディアアート

今回の展示では、『のぞきカラクリ』『あなもるフォーズ』という二点の作品を展示しました。このふたつの作品は、江戸時代に大衆芸能として、それぞれ覗機関（のぞきからくり）、アナモルフォーズ（日本では鞘絵）という名称で楽しまれた映像装置です。この映像装置と同様の仕組みを用いて、木津川市の町並み、自然をモチーフに作品として仕上げました。普段とは違う、木津川市をお見せできればと努めました。

「薄紅」 コニシマキコ
絵画

初めてここを訪れたとき、夕方の山際に映える空の色がとても印象的で、そこから今回の作品のイメージを思いはじめました。うす赤く染まった色の境目から、あっちの世界とこっちの世界があるような気がして、そこに落ちてゆく色がこんなだったらいいなと描いています。自然の美しさ、いのちのつながり、もやっとした情景に日々を重ねて。心に焼きつくような、ずっと居たいと思える空間になればと思います。

「くうきだま（静寂）」 SKFY4
インスタレーション × 映像



20 代〜80 歳まで、櫻井恵子（造形作家）・片平修（パフォーマー・美術家）・藤本達也（映像作家）・吉永良子（縫製家）がこの作品を創った。約 15 分の静寂の後に、スクリーン平面投影を目的として制作された映像作品が、オブジェ的球体バルーンと共鳴（エコー）することによって、バルーン自体が変質させられるだけでなく、見る側に刻々と変化していく空間を体験していただいた。

8. 北大路集会所

「記憶のあとさき 2011」 加藤史江
墨と紙

一生の時間の流れの中でさまざまな時を生きていく。人との出会いやかかわりの中で、別の時間の中に自分が入り込み、時間軸がクロスオーバーする。さまざまな記憶と時間のカタチを、紙と墨でつくりました。紙も墨も木から生まれた素材。いつか土へと還り生まれ変わる、そんないのちのつながりも感じていただければ。

9. 料亭川喜

「どこか」 中尾めぐみ

油彩

今回の出展がきまってから、ふらり木津周辺を歩き始めました。最初は描きたいなにかを見つけなければ、と歩き始めたが、途中からどうでもよくなりました。なぜなら、ここはとても大きな川とそれを囲うようなジャングルの様な自然、とても静かな町で心地良くて、気持ちが満たされてしまったからです。「考えるな」といっているようでした。「眺める」ことで見つけた断片的イメージを私なりに「かたち」にしました。

「記憶　跡　流れ」 堀浩子

平面作品、インスタレーション

土にはさまざまな生物活動などの影響を受けた「跡」があるということを前提に置き、土の持つ“ 記憶 ”とそこに人の手で新たに刻まれるもの、絵、キズ、跡、の重なり。刻まれたものはそれらもいつかはまた土の一部となり、土の記憶となっていく…。
今回は鹿背山の土を使い、歴史と趣のある建造物の中で物事が積み重なる過程の一部分、またはそういった物事の記憶、流れをテーマに表現しました。

「Mado」 玉野由理
油彩

日常に潜むあたりまえの奇跡を見つめ、自然に生きるものと繋がる感覚。二つの異なる空間を繋ぐ窓のように、人や自然との間も繋いでくれるかもしれない。自然とのよりよい関係を追求すべく、そんな事を思いながら描いたいろいろなかたちです。

10. 八木邸

「祖父と私の旅」 伊藤舞
インスタレーション

2006年ー22歳の誕生日ーに祖父が他界して以来、手元に遺った約200個のマッチの所在を訪ねる旅を続けている。数十年前のマッチを頼りにその場に赴く時、道程にも予期せぬ出会いと別れがあった。様々な人々との関わりの中で“当たり前ということの尊さ”を強く意識した旅の事跡を、喫茶店に見立てた空間の中で表現し、空間全体や来場者すべてを作品とする。この作品は、私1人の手によって作られるのではなく、訪れる人々と作品が出会い、別れることによって完成する。

11. 本町一丁目集会所

「木津川から宇宙へ」　林和音
インスタレーション

鉄工所跡には今まで刻まれてきた時間や歴史が静かに漂う
見えないもの
見えてくるとき
繋がりは波紋の様にひろがり続ける
摩訶不思議な世界へと
気付けばそこが宇宙のはじまりの様に
木津川から宇宙へ　　意識の遊びで漂いたい

「絵の声、色の夢」　伊吹拓
油彩

この夏、3ヶ月間にわたり木津川市鹿背山の倉庫で描いた作品を並べた。結界をくぐり入るその地域には、静かで強い地の力があり、鳥の声に呼応して、画面にはどんな震えがこもるのだろう。硯のうえの墨をするようにゆっくりと絵の具を溶きながら、この色自体が辿り着く場所はどこなんだろう。そんなことを思いながら穏やかに絵が描けました。絵を描くことは、真剣勝負なんだと改めて感じさせられた貴重な夏でした。絵の声が響き渡ることを願って。

加茂エリア

13.ランプ小屋

明治30年の赤煉瓦建築。今回大掃除をして初めての一般公開となった。

14.松田木材

材木屋さんの旧事務所。アートでは町の写真館を想定して展示を行った。

15.旧加茂図書館

平屋鉄筋構造。掃除を終えた会場はアートギャラリーのようだった。

16.川越織物工場跡

工場では壁紙も生産していた。作家の制作のヒントに繋がったという。

17.白亜庵

仕出し屋さんのガレージ。駅前で船屋通り入口という便利な立地。

18.coffee 豆 凜 1階

船屋通りに面したガラス窓が、パフォーマンスの舞台となった。

19.石井米穀店

精米機は覆われているが、事務スペースや看板にお米屋さんの名残が。

20.小西邸

しっかりした石組みは災害から薬を守るためだった。旧薬局の邸宅。

21.中森神社

春日若宮社元宮。洪水で流されて以来里の山で大切に受け継がれている。

22.加茂JA倉庫

鉄扉、古い5寸の錠前でしっかり蔵を守っている。四季の蔦が美しい。

23.村田鍛冶屋

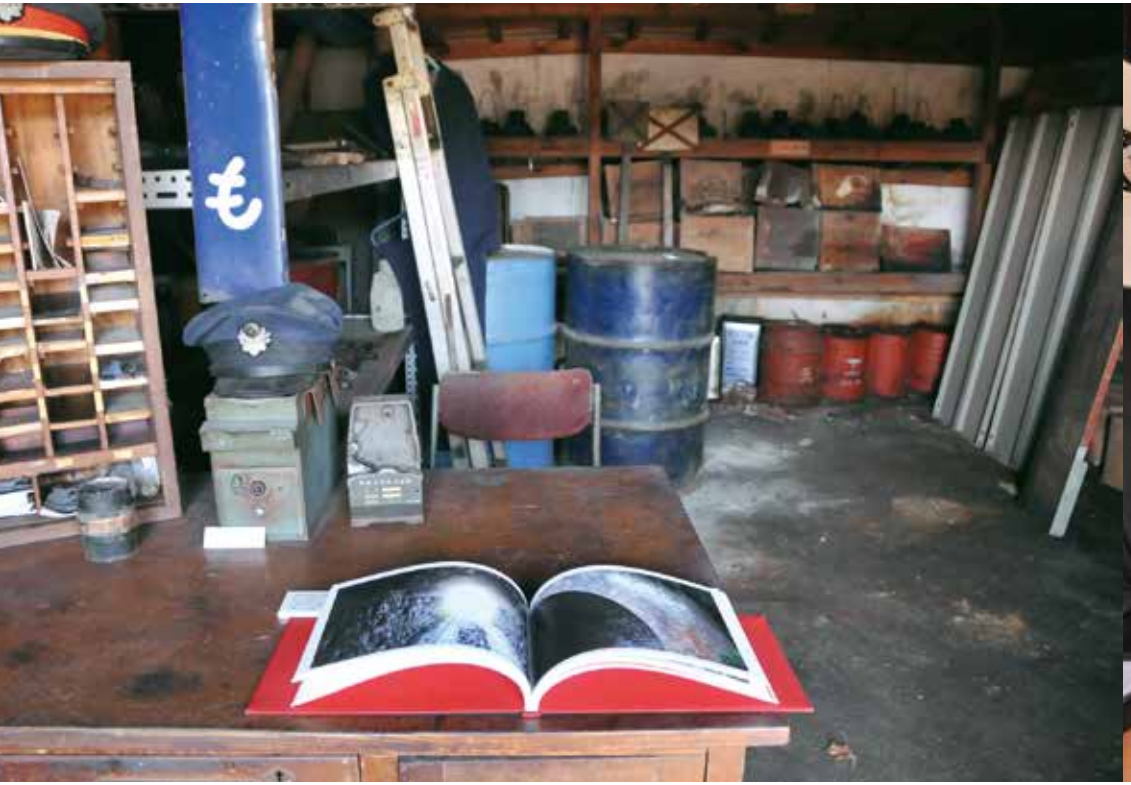
京都府下で最後の手打ち鍛冶屋。道具が残る作業場に職人魂が宿る。

24.木津川土手

愛すべき私たちの木津川。100年後も変わらぬ美しさを守っていきたい。

「大仏鉄道所記」 三谷智恵

造本



この木津川市にかつて「大仏鉄道」と呼ばれた愛らしい名前のSLが走っていた。今から約100年も昔の話。それを物語る資料はほぼ残されていない。しかし、数々の遺構と、それを愛した人の思い出と、知らずもがな思い続けた人の思いは今もこの土地に残っていた。それらを拾い集めてもう一度見直し、この本にまとめました。

13. ランプ小屋

「みつめる写真館」 林直

写真

今回幸運にも私が生まれ育った家の隣での展示でした。小さい頃からお世話になった「松田のおじいちゃん」が天国で喜んでくれるようがんばりました。作品はいろんな方の「大切なもの」を撮った『みつめる写真館』。人から物、人から人へと注がれた思いと時間を写し込みました。消費社会と言われて久しい今日、劣悪な事件や容赦のない環境の変化に対して私達が立ち向かうには、一見無関係に感じるこれらの物たちから学び、役立てる事がたくさんあるのだと改めて思いました。

14. 松田木材

「Catch the Sun」 少年少女科学クラブ （招待作家）
インスタレーション

沈黙は一つの原始現象、つまり、もはやそれ以上何物にも還元され得ない一つの本源的な事象である。騒音に満ちた環境に慣れてしまった僕達は、ふと本来鋭敏な感覚をもっていたのだろうと気付く時がある。目に見えないもの、聴こえない音、微かに感じる気配、この感覚を取り戻せないかと思う。月の光を目印に正の走行性を持つ蛾が夜の来るのを待っているように。

15. 旧加茂図書館

「髪の着物ー髣髴ー」 松谷真未
インスタレーション

私はつくるため、大量の髪の毛を集めました。大量の髪の毛からは、人間の強い臭いがしました。部屋中にまき散らかした髪の毛は、私の衣服にまとわりつき、私に独特の不快感をともなう感傷を覚えさせました。できた着物には、袖を通すことを拒絶する気配を感じさせ、私は袖を通すことができませんでした。「髪」と「神」を同一視する発想は、世界中のいたるところに見うけられるそうです。おそらく私が感じた気配も「髪を通した神」に対するものではないかと想像します。

16. 川越織物工場跡

「フキだし屋台プロジェクト」 松村忠寿
コミュニケーションアート

「フキだしproject」は言葉を「フキだし」の形でビジュアル化するプロジェクトです。私の作品ではバルーンはひとつのアイテムにすぎず、人、環境、言葉（吹き出しに書かれた）があって初めて一つの作品となります。今回のプロジェクトは裏面に京都府の方言またはTwitterをかいして集まったつぶやき、表面に屋台に来た人のリアルタイムの言葉を入れ、それをその人に持ってもらう事により、木津川の今を表現したいと考えます。

17. 白亜庵

「和同開凜」 奥本陽一
インスタレーション、パフォーマンス

加茂町には、和同開珎が鋳造された銭司という場所があります。和同開珎という言葉は、調和して一つになる事で、たやすく得られない貴重なものが始まるという、民を安堵させる根本が込められていたと考えられます。今回、この記憶をたぐり寄せ、又、人が集まりコーヒーが飲めるCoffee 豆 凜さんからインスピレーションを受け、和同開凜なるものを表現しました。調和の中で、それぞれが凜として生きる。凜とした心持ちは、個を大切にしながらも、人と人とが歩み寄るには、大切な態度だと思います。

18. coffee 豆 凜

「アニマル」 坂田源平

絵画、彫刻

僕にとって作品とは、図鑑のような存在です。自分の頭の中にだけ生息する「アニマル」それを自分の絵や木彫で図鑑にしていく。新種の発見を目指す学者さんと何となく近いのではないかと。作品をつくる時、どこが良いという明確なものではなく、ぼんやりと単純な感覚として良いと思ってもらえることが出来ればと思っています。「なんかいい。」それが僕の目標です。

19. 石井米穀店

「parking chair」 永田幹

家具

椅子の定義とはなにか。ビジュアルやフォルムなのか。座るという行為なのか。ひとつの答えなんてないのだろうが、少し考えてみた。

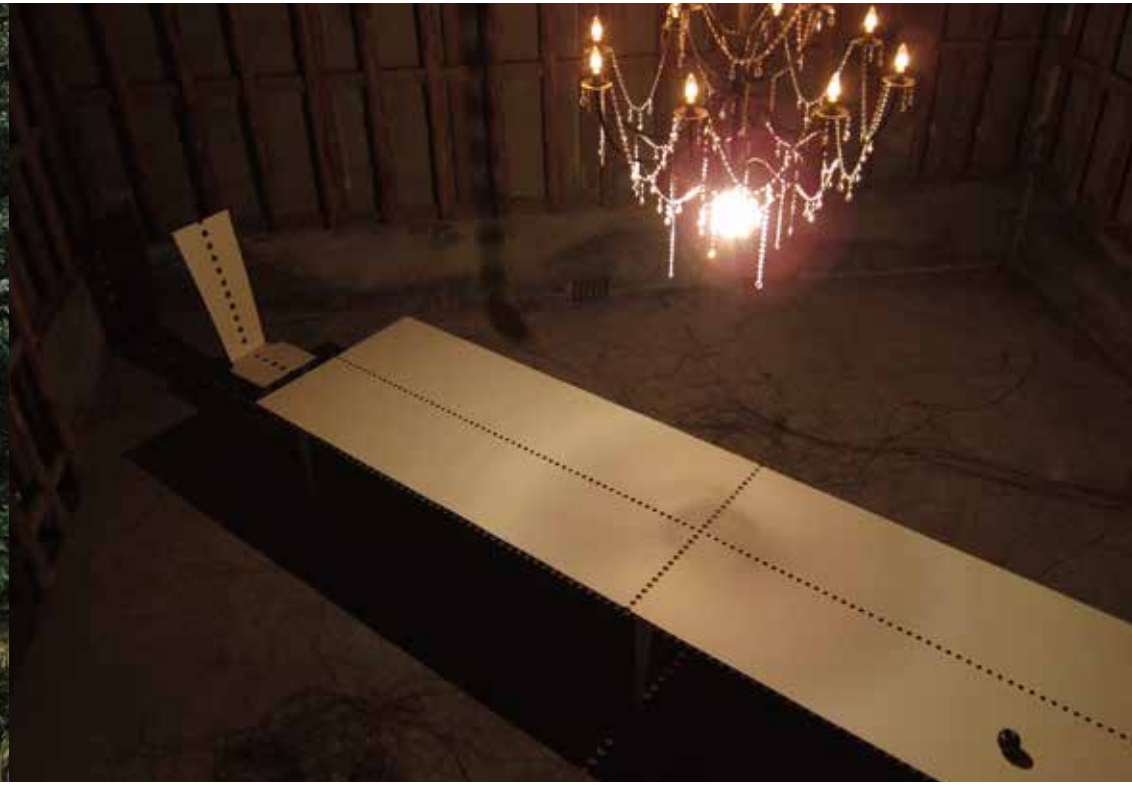
20. 小西邸

「遡及空間」 中村岳
インスタレーション

この土地の御神木をヒントに作品を構想しました。諏訪大社で6年に一度行われる御柱祭に見られるように、樹木を立てる行為は、日本建築の根源的な形で、神道の自然崇拝は、あらゆる物に宿るという神や精霊を降臨させていました。今回の作品の柱は意図的にあるシンボリックな形をしています。明治時代の神仏分離以前は、神社建築の中に五重塔や鐘楼が混在していました。日本人の宗教観が現代においても比較的寛容であることは、多元的な物の見方ができる文化の特徴を築いているのだと思います。

21. 中森神社

「白くて、薄くて、軽いしつらい」 長谷川政弘 （招待作家）
インスタレーション



鉄板の薄さゆえ用を満たす事のできない家具のかたちをしたオブジェたち。
しかしそれらは立体として儚く存在する。
いまでは使われなくなった空間と使えないもの。

この儚いしつらえを演出するため最後につくったシャンデリアが
主役を脅かした感は否めない。
ただ、この古い倉庫が非日常の空間となったことで私の仕事は完成する。

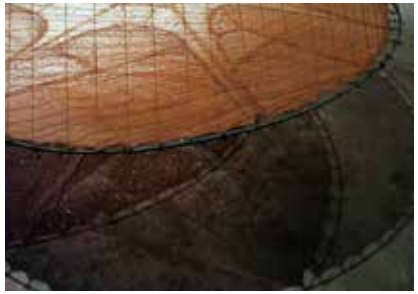
22. 加茂JA倉庫

「yori-yori」 tagiruka
インスタレーション

其処はきっと知らない場所だから、ボクは静かに佇んでキミが動き出すのを待ってるよ。キミを知りたくて眼を閉じ其処に溶けていく。速すぎて気付かなかっただけなんだ。座り込んで見上げた空（くう）に、キミの表情は幾重にも重なりボクを見つめている。コツコツと針の歩く音、ボクはキミに出会ったんだ。その声が止むまでボクは其処でただ佇んで、そっとキミの言葉を拾い集める。

「The Vessel of Loci」 竹股桂
彫刻

暗い空間の中、天井から糸で吊るした和紙の円盤は 照明を受けて静かに浮び上がる。円盤上の小さな穴は無数の星の光を床に投影する。私はこの作品に3.11東日本大震災への追悼の意を込め、亡くなられた方々へのRequiemとして制作した。



photographer：Kinji Fujii

「上田保護帽製作所」　上田周平
彫刻

「上田保護帽製作所」では、金銭的な援助をしてくださるスポンサーを募集しました。そのロゴを作品の中に取り入れることで、スポンサーと作家の信用関係が一目でわかるようになりました。かつて芸術の庇護者を「パトロン」と呼んでいた頃、作品にはその名が記された明細書が付属していただけでした。スポンサー（パトロン）の存在を作品の前面に押し出すことは、援助に対する感謝の表れであり、作品も華やかになります。まるでモータースポーツの世界のように。

23. 村田鍛冶屋

「風の標べ」　許斐英明
音響彫刻

ふっと肌に触れ、木々の葉をゆらし、川面にさざ波をたててあっという間に通り過ぎてゆく「風」という存在。木津川の「風」に触れようと、風が吹くと鳴り出す弦楽器「エオリアンハープ」を木津川の土手に設置して、風の移ろいを音色に変えて、会期中の11日間、耳を澄まし続けました。音が鳴らない雨の日もありました。どこかに迷い込んだような幻想的な夕方も。一目でわからなくても、木津川は確かにゆっくりと変わり続けていました。

24. 木津川土手

「木津川アート basic」

1. 水島太郎／陶
2. 久保田純／陶
3. 園川絢也／インスタレーション
4. 藪本絹美／写真

すべてのはじまりは木津川アート2010でした。そこで出会い、そこに出展した作家たちが、木津川アート2011を盛り上げるべく、木津川アートBASICというプロジェクトを立ち上げました。木津川市にて作家活動を続ける作家たち、この地を愛し木津川アートを愛する作家たちです。場所は木津本町の元老舗魚屋「明石屋」。役者はそろい、こんな場が生まれました。

明石屋